

かきつばた

柳河の古きながれのかきつばた、晝はONGOの手にかをり、夜は菱（しを）れて
三味線の細い吐息（といき）に泣きあかす。

（鳩（ケエツグリ）のあたまに火が點（つ）いた、潜（す）んだと思ふたら、ちよいと消えた。）

（注）ONGOは良家の娘。（柳川語）“ゴンシャン”とも言う

日本近代文学大系（角川書店）北原白秋集の注釈によれば、“晝は Ongo の手にかをり”は、晝は良家の娘たちに触られた意で、喜びの暗示。“夜は菱（しを）れて…泣きあかす”は痴情を思ふ悲しみの暗示とある。では喜び、悲しんでいるのは誰なのだろうか。

それは冒頭にある“柳河の古きながれのかきつばた”である。この五・七・五の俳句のリズムを伴ったフレーズは“柳河に古く代々続く北原家”を表すもの。かきつばたは北原家を意味するとともに、ここではトンカジョン（長男）である白秋自身を指すものであろう。

ちなみに北原家の家紋は「花菱」で菱は一年生の水草である。このことから掘割の流れにある「かきつばた」で北原家を象徴したものと推測される。

それにしてもこの喜びと悲しみのなんとたわいなく入れ替わることか。そのことを鳩（かいつぶり）のあたまが夕日に照らされ赤く染まって火がついたように 見えたと思ったら、潜（す）ってすぐ消えた、いとも簡単に変わってしまうことを子供達の囃詞（はやしことば）にのせて自嘲的に表現している。

梅雨の晴れ間

廻（まは）せ、廻（まは）せ、水ぐるま、
けふの午（ひる）から忠信（ただのぶ）が隈（くま）どり紅（あか）い しゃつ面（つら）に
足どりかろく、手もかろく、狐六法（きつねろつぽ）踏みゆかむ、花道の下、水ぐるま

廻（まは）せ、廻（まは）せ、水ぐるま、雨に濡れたる古むしろ、
圓天井のその屋根に、青い空透き、日の光の、七寶（しつぽう）のごときらきらと、
化粧部屋（けしやうべや）にも笑ふなり。

廻（まは）せ、廻（まは）せ、水ぐるま、
梅雨（つゆ）の晴れ間（ま）の一日（いちにち）を、せめて楽しく浮かれよと
廻り舞臺も滑（すべ）るなり、水を汲み出せ、そのしたの 葱の畑（はたけ）のたまり水。

廻（まは）せ、廻（まは）せ、水ぐるま、
だんだら幕の黒と赤、すこしかかげてなつかしく、旅の女形（おやま）もさし覗く、
水を汲み出せ、平土間（ひらどま）の、田舎芝居の菫畑（いらばたけ）。

廻（まは）せ、廻（まは）せ、水ぐるま、
はやも午（ひる）から忠信（ただのぶ）が紅隈（べにくま）とつたしやつ面（つら）に
足どりかろく、手もかろく、狐六法（きつねろつぽふ）踏みゆかむ花道の下、水ぐるま。

梅雨の晴れ間 解説

「梅雨の晴れ間」で歌われているのは、いわゆる「農村歌舞伎」の舞台を取り巻くワンシーンです。一部の地域には常設の農村舞台が今も残っていますし、それ以外の地域でも、休耕中の畑に芝居小屋を組み立てて、地べたに座って観るような事例は全国にあったようです。そんな小さな「地歌舞伎」に関わる人々の姿を軽妙に描いているのが、この「梅雨の晴れ間」になります。

廻せ、廻せ、水ぐるま、

「水車(すいしゃ)」というと「水を上から下に落とすことで動力を得る道具」ですが、逆に「水車(みずぐるま)」というのは「動力を加えることで水を下から上に運ぶ道具」を指します。移動式で人間の背丈くらいの高さがあり、人が羽根の部分に登って踏み続けることで用水路から田圃に灌漑をします。この詩の場面では、芝居小屋の前の畑に長雨で水が溜まってしまったので、公演が始まる前に水車(みずぐるま)で水を掻き出しています。



特に最初の 4 小節では小さく丁寧に声を出して、どこかから水車を回す音が聞こえてくるような静かな風情を歌うことで、「これから何かが始まるぞ」という印象を聴き手に与えることができます。

けふの午(ひる)から忠信(ただのぶ)が隈どり紅いしやつ面に

『義経千本桜』という歌舞伎があります。源平合戦後に都落ちした源義経と、彼の行く先で出会う生き残った平氏たちの姿を描いた物語で、庶民の間では定番といえるポピュラーなものです。忠信は『千本桜』の中の「狐忠信」という段に登場する佐藤忠信という武将で、義経から信頼を置かれる忠臣なのですが、実は狐が人間に化けた姿だったという物語です。

「隈どり」は歌舞伎役者が目の周りを赤色で装飾する化粧のこと。「しやつ面」とは「他人をののしって、その顔を悪くいう語」とあります。忠信役の役者をコミカルに描いているわけですね。



足どりかろく、手もかろく狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

忠信に化けた狐は姿こそ人間の姿をしているのですが、ふとした時に思わず人間離れした動きを見せてしまいます。これを**狐六法**（六法 or 六方＝歌舞伎における典型的な歩き芸）とよび、人間の役者が狐さながらの身のこなしを披露するのが「**狐忠信**」の最大の名物です。要するに、客の方も芝居の筋書きを知っていて、忠信の正体が狐であると理解した上で上演を楽しむのでしょう。



続く「足取りかろく、手もかろく」は、狐六法と水車を踏む動きの両方に掛けて軽やかさを表現しているものと思われます。歌い手はこの軽やかさを表現するために、**Piano** とスタッカートを守って演奏します。（ここで大きい声を出したら軽やかさも**もありませんよね！）

廻せ、廻せ、水ぐるま、雨に濡れたる古むしろ、円天井のその屋根に、

原典『思ひ出』の一節に「野の隅には粗末な蓆(むしろ)張りの円天井が作られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭(らっぱ)の懐かしさよ」とあります。円天井には青空(＝天井が存在しない)という意味もあるそうですが、ここでは本当に円形をした天井と解釈するのが妥当でしょう。野の隅に組み立てられた芝居小屋の粗末な屋根のむしろが、梅雨の長雨で濡れているわけです。

先ほどまでは**状況説明**に終始していた詩の視点が、芝居小屋の方にクローズアップされてきましたね。遠くから眺めるだけでは感じ取れなかった、水車を踏む力強いパワーが見えるようになりました。曲もこの辺りから盛り上がってきます。**Forte** を意識して歌いましょう。

青い空透き、日光の(日の光)、七宝のごときらきらと、化粧部屋にも笑うなり。

この部分、原典では「日の光」となっていますが、曲では「日光の」と歌われています。

七宝の原義は「仏教の経典に説かれる7種の宝石のこと」。要するに宝石ですね。屋根のむしろの上の水滴が日の光を受けてきらきら輝いている情景です。この水滴の儚さ・きらきら感を出すために、**作曲者はここにスタッカートを付けています。**

続く「化粧部屋にも笑うなり」も恐らく主語は日の光のままで、化粧部屋(的な空間)に光が差す様を「笑う」と表現しているのではないのでしょうか。ここでの**視点移動**、そして「笑う」ような日光の柔らかさを表現するために、ここは一転して **Mezzo Piano** で曲調を変えています。よく見ると「きら

きらと」の2つめの「きらと」にはスタッカートが付いていませんが、これも、続く「化粧部屋」の曲調に備えるためです。

廻せ、廻せ、水ぐるま、梅雨の晴れ間の一日を、せめて楽しく浮かれよと

ここでいう梅雨の晴れ間は、単なる天候の話ではありません。城下町・柳河は明治維新で衰退の憂き目にあい、どこか陰鬱な雰囲気、漂う土地だったことは既にお話ししました。それに加えて、明治初期の農村は娯楽も乏しく、貧しさ、そして病や死というものが今より遥かに身近にあったわけです。そんな厳しい生活をひと時忘れ、皆で集まって田舎芝居で盛り上がる、そんな束の間の非日常（民俗学的な言葉でいえば「ハレ」）の一日こそが、この歌に描かれた「梅雨の晴れ間」の世界観なのです。

そう意識して模範演奏を聴くと、単純な楽しさや開放感だけではなく、どこか切なさを含んだメロディーに聞こえませんか？ この辺の感情まで表現できれば傑作です。そして、この間にも水車は回り続けます。

廻り舞台も滑るなり、水を汲み出せ、そのしたの葱の畑のたまり水。

廻り舞台は回転を利用した舞台の転換装置の一種です。農村歌舞伎というのは常設タイプ・組立タイプの両方があったそうですが、どちらかは分かりません。一方客席の方はというと、休耕中の畑に適当にむしろを敷いて客席代わりにするのが普通でした。

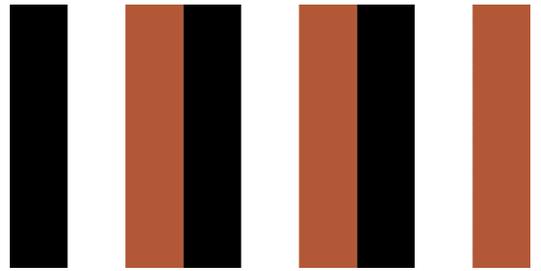


ネギは春先（調べたところ、西日本でネギというと専ら葉ネギを指すそうです）に収穫するので、ちょうど梅雨の時期は休耕になります。そこを利用して芝居をやろうとしたところ、長雨で水が溜まってしまったので、さあ汲み出せといった感じでしょうか。

曲の中の水車はここで一休みしたのち、また静かに回りだします。このあたりの動静や強弱、そしてどこか物寂しい和風のオシャレ和音をうまく表現していきましょう。

廻せ、廻せ、水ぐるま、だんだら幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく

上下の掛け合いによって、再び少しずつ水車が回り始めます。上方言葉では主に「平行縞の繰り返し模様」を指すようなので、ここは歌舞伎でお馴染みのあの幕（定式幕）と解釈するのが妥当でしょう。とは言っても現代の歌舞伎座のような大仰なものではなく、畑の隅にそれこそ「すこしかかけて」雰囲気を出す程度だったのではと想像しています。



「中村座式」とよばれる、黒と赤のタイプの定式幕

なお、古語の「なつかし」は過去を思い出すニュアンスだけでなく、単に現在の様子を見て「心ひかれる」「親しみがもてる」の意味でも使います。砕けた言葉で訳せば「それっぽく」といったところでしょうか。

旅の女形(おやま)もさし覗く、水を汲み出せ、平土間の、田舎芝居の葦畑。

女形とは歌舞伎において「女性を演じる役者」のことです。この時代の農村歌舞伎には2種類あって、村の人が化粧をして演じる形式の他に、「買い芝居」といって、近隣の町から巡業してくる役者集団を招いて上演を行うこともありました。それだけ、歌舞伎は当時の農村にとって貴重な娯楽だったのです。



【長野県の農村歌舞伎のようす】

平土間というのは昔の芝居小屋の客席にあたる部分で、地べたに腰を下ろして芝居を観ます。今回の場合は休耕中の葦畑がそれに当たるわけです。

巡業の役者も女形姿で顔を出して準備万端、さあ後はこの水浸しの客席を何とかするだけだ！といった具合で、曲の盛り上がりは最高潮を迎えます。ここの和音が決まったら格好良いですね。

廻せ、廻せ、水ぐるま、はやも午(ひる)から忠信(ただのぶ)が紅隈どったしやつ面に

再び水車が回り始めます。各パート別々に回して、一旦弱くなった後、今度は全員でパワーを込めて回していますね（この部分は『柳河風俗詩』でよく出てくる、曲の最後に視点を戻してもう一度冒頭のフレーズを繰り返す手法です。歌の途中で情景を接写して登場人物の複雑な心情を描き、歌い手も

聴き手も思わず感情的になりますが、もう一度 一步引いて見てみると、先ほどと同じ風景が広がっているのです。農村の日常はこうして淡々と続いていきます。曲の盛り上がりや変化を意識しつつ、冒頭の大切さを忘れずに歌いましょう。

足どりかろく、手もかろく、狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

いよいよ曲の最後。ここでも狐忠信の「足取りかろく、手もかろく」を表現するためにスタッカートが付いていますが、冒頭と異なり「狐六法」には付いていないところに注意です。違いをはっきりさせるために、前に進むようなフレーズ感を意識して歌いましょう。

最後の「水ぐるま……………」は、原典にも同じ数の三点リーダーが付いています。「水ぐるま。」でも「水ぐるま！」ではなく「水ぐるま……………」なのです。明治の農村を生きる人たちの悲喜こもごもの感情が、ここに凝縮されて余韻として浮かび上がってくる気がしませんか？ 楽譜の指示通り曲の終わりを盛り上げるのは構わないのですが、この余韻を味わうために、羽目を外しすぎずに最後を飾りましょう。